

「その口もきつと
甘い」

2010/04/18

歯を立てて、そのまま力を込めればきりとそれは砕けた。
甘い。

口の中にかじりとった欠片を転がして溶かして味わう。
そしてひとりでこっそりと、にんまりご機嫌に笑ってみた。

「うげ、なんてもん食べてんですか」

太子を見るなり妹子は眉をひそめてそんなことを言ったが、
上機嫌なのか、太子は気にしなかった。

「これか？　へっへーん、うらやましいんだろ？　やらない

ぞ！　私がもらったんだからな！」

「要りませんよ。で、何なんですか？」

太子は黒い板みたいなのに歯を立ててかみ砕き、口の中
に入れてしまってから得意げに笑って答えた。

「チョコレートだよ！」

「ちよこれーと？　なんですかそれ。食べて大丈夫なんです
か？　真っ黒ですよ？」

「さあ。よくわからないけど食べれるぞ。うまいし。竹中さ
んがくれたんだけど、ところで妹子、“ばれんたいん”って
なんだ？」

「知りませんよ。竹中さんに聞いてくださいよ」

「聞こうと思ったら帰っちゃった。友達と旅行なんだって。

蛇口からするつと」

「帰ったの！？　蛇口から！？」

「一回突っかったから押し込むの手伝ってあげたら感謝さ
れた」

「詰まったの！？　もうちゃんと歩いて帰ればいいのに！」

妹子が己の想像力を最大限に發揮し、竹中さんが蛇口に詰
まる様子を思い描く間にも太子はもっさもっさとチョコレ
ートを食べ続けていた。

「なんか黒くて得体の知れないですね」

げんなりと、怪訝そうに嫌そうに、妹子は太子を見た。気味の悪いものでも見るようなその態度にかちんときて何か言おうとしたものの、太子は思い直してにやりと笑って見せた。

「……………その顔心底ムカつく」

妹子が下唇をわずかに突き出すようにしていかにも不愉快そうな表情になる。

太子はにやにやと笑ったまま、歯形のくつきりと残るチョコレートを妹子の目の前に突きつけた。

「お前も食べてみるか？」

「僕が、これを？」

「そうそう。まあ、意気地なしの妹子にはそんな勇氣ないと思っけどなー？」

そのあからさまな挑発に妹子が眉を跳ね上げた。思った通りの反応に太子はたちまち機嫌を良くする。

思った通り、妹子はけっこう負けず嫌いだ。

「こんなにうまいのに、もったいないなあ」

ほれほれ、と太子は妹子の目の前でチョコレートをちらつ

かせた。いつぶち切れた妹子に怒鳴られたって驚かないし、殴られそうになつたつて華麗に避けてやるもんね。そんなことを考えて、少しだけ身構えていつでも反応できるようにして。

そんなもつて妹子はもつといらいらすればいいと思うのだった。いい気味だ。いつも私のこと、バカにするから仕返しだ。やーいやーい、妹子の意気地なし！

「……………それ、そんなにおいしいんですか？」

「そりやもちろん！ きつとカレーに入れたらもつとうまくなるぞ！ あ、そうだ今度やってみよう」

「確かに、形はルーに似てますけど」「だるう？」

うまいぞ、と太子は得意になる。

はあ、と妹子は気の抜けたような返事をする。

調子に乗った太子は気付かなかつたけれども、妹子は考え込むように少し黙り込んだ後では、一変して表情から不愉快さは跡形もなく消えていた。

気付かずにべらべらと、得意になつてしゃべり続ける太子をじつと見ている。目元にわずかにしわを刻んで、次の瞬間にはもう、何食わぬ顔して太子の話を聞いていた。

妹子はいつものように殴ってきたりはしなかった。身構えていたにもかかわらず、太子はその不自然さを意識できない。

「じゃあ、ちよつとだけ」

だからそう言って、妹子が太子の手をつかんだ時、結局とつさに何の反応もできなかった時点でやつぱり太子は抜けていた。

「え？」

妹子はつかまえた手ごとチヨコレートを顔の前からどかして太子を見る。

ぽかんと、太子が見つめている先で妹子の顔はどんどん近づいてきて、輪郭がぼけて焦点が合わずに何も見えず、気が付いたときには唇に柔らかいものが押し当てられていた。

え、ともう一度思う。思つて、それ以上頭が回らなくなる。呆然としているうちに唇の間から舌が侵入してくる。口内をまさぐられて思わず舌を嘔みそうになる。あわてて力を抜こうとするとされるがままになってしまい、無意識のうちに押し返そうと舌を動かせばやんわりと絡めとられる。そのままなだめるように、口付けは深いものに変わる。

甘い。甘くて、息が苦しい。

頭が真つ白だ。

え、何これ。妹子近い。すごい近い、唇と唇がくっついてて。妹子の口の中って冷たいから気持ちいい。手だつていつも冷たいし。何なんだろう。冷え性なのか。男のくせに。

ああでも妹子らしいや。もしかしたら心があつたかいかも
しれないし。どうだか。

ちゅ、つて。戯れるみたいにして軽く口を吸われて。
そうだ、これは。

キスだ。

ようやく状況を理解して太子は目を見開く。閉じようと思
いもしなかった。気付いてみれば妹子だつて目を閉じてない
近すぎてよく見えていないはずなだけけど、急に気恥ずかし
くなった。観察されているような気さえるす。

まつげだつて触れているようでくすぐつたい。笑うように
目が細められたと思つたらもうだめだつた。腕を振り回して
妹子の肩を押す。自由になるのは片手だけだつた。チヨコレ
ートを持った方の手は、まだ妹子に捕まつたままだ。けつこ
うしつかりと掴まれている。そのことにも今、ようやく気付
く。

妹子の指の一本一本までよくわかるようだつた。手首にし
つかりと巻きついていて。脈でも測るみたいに親指が血管の
上を押していて、手首が軽く締め付けられている。まるで離
さないともいうように。

一気に足下から頭のでつぺんにまで恥ずかしさが駆け上つ
てきた。感情の起伏が大きくて急激すぎてもういっそ、太子
は泣きそうになる。くらくらする。息が苦しい！

じたばたと、加減なくもうめちやくちやくに暴れたところで
ようやく妹子は太子から離れた。開放された太子はぱくぱく

と口を開いても何も言えない。頭の中が空っぽで、言葉なんか浮かぶはずない。ただ息苦しさを取り戻すみたいに肺に空気を送り込むだけで精一杯だ。

手だけはまだ掴まれたままだった。それに気付いているのかわからないのか、太子は目を白黒させたまま呆然としている。そんな太子にお構いなしに、妹子は唇の端から垂れていた唾液まで親指で拭って口に含んだ。

呆然としたままその様子まで見つめてしまつて、だんだんと太子の耳が赤くなる。

それにも構うことなくゆつくりと、妹子は眉をしかめて呟いた。

「……………甘い」

と、ただ一言だけ。

「チョコレートを、食べるよ！」

私じゃなくて！　と言いつうになつて太子はその言葉の衝撃に自分自身で打ちのめされた。

なんだそれなんだそれなんだそれ。

いや別に、私が食べられたわけじゃないし！
ただちゆうされただけだし！

「ぎゃあ！」

「何なんですすかいきなり一人で勝手に身悶えだして。きもいですよ正直」

「誰のせいだよ誰の！！」

「病気が何かですか？　医者を呼びましょうか」

「きいいい！！　しらばつくりられた！　あんまりだ！」

騒ぎだす太子を心底かわいそうなものでも見るような目で見て、妹子は深々とため息を吐いた。

「何ですか。何が不満なんですか？　ちよこれーと、でしたっけ？　僕ちゃんと食べたじゃないですか」

「違うよ！　お前、その……………だからさあつ！！」

「何ですか。言いたいことがあるならばつきり言ってください！！」

「私の口から言えるか恥ずかしい！」

「……………よくわかんないですけど。それにしてもなんですかこの甘つたるい食べ物。びつくりしましたよ」

「私はお前にびつくりだ！」

「はあ、そうですか？」

妹子は眉間にしわを刻んで平然とチョコレートを評してい

る。カレーに合いますかね、これ。なんかべたべたします。のどに絡む。ずっと口の中甘いんですけど。何か飲み物ほしくなりますね。よくこれだけで食べていられるな。お茶でもいれてよようかなあ……………」

太子はそんな妹子を指さして、反論を試みるもなんだか空しくなつて、がっくりと肩を落としてうなだれた。

「もう、いい」

「はあ。まあごちそうさまでした」

妹子はいたつて落ち着いている。白々しいとも言えるし通常運行の平然さでもある。それと自分の動揺っぷりを比べて太子は落ち込んだ。それはもうどっぷりと。

やけくそみたいににして猛然と、太子は残りのチョコレートにかじりついた。

バリバリとかみ砕いて次々に飲み込んでいく。甘さがのどにからみついてくる。手で持っている場所から溶けだして、指先がべたべたした。それも口に入れてなめてしまう。

「もう知らん、もう分けてやらないからな！」

「いらないますよ、そんな、甘いもの」

お茶いれてきます、と言いつつ残して妹子は立ち去った。あわてて口の中のを全部飲み込んで、妹子私のも、と太子は叫ぶ。返事はなかった。聞こえただろうか。そわそわと体を

揺する。

その落ち着きのなさに気がついて太子は正座をしてみた。部屋に一人きり、叱られたみたいにしっと正座している様は自分でもかつこ悪いと思つたけれど、この姿勢が一番冷静になれる。……………はず、だ。

背中を丸めたままチョコレートの最後のひとかけらを握りしめて、落ち着け、落ち着け、と太子は自分に言い聞かせる。その途中で、でも今ならあいつの口も甘いのかなと、何となく考えてしまつてぶんぶん頭を振つた。

そのまま妹子が二人分の湯呑みを持って帰ってくるまで、

太子は同じ姿勢でずつとぶつぶつと呟いていた。

「頭悪く見えますよ、太子」

「……………誰のせいだ、誰の！」

当たり前のことではあるが太子の手のひらでチョコレート

は溶けていて、それを妹子に見つかつてもう一悶着あつたけどそれはまた別の話。

「看病しましよ
(妹子の場合)」

2010/04/24

「妹子！ 看病しに来たぞ大丈夫か！？」
「……………えつと？」

事態が飲み込めずにぼんやりと立ち尽くしている間に、あれよあれよという間に太子のペースに乗せられて、気付けばパジャマに着替えをさせられて、布団に押し込まれてしまっていた。

「えつとえつと、ああそうだこれ！ くわえて！ で、えーつと……………そうだ喉飴買ってきたんだ！！ っってお前な体温計なんか口に入れてるんだよ！！ ……………でも熱計んなきやだし……………じゃあもういいから後で食べて！ でー、えつと、えつとー……………そうだ水枕！ 濡れタオルと、飲み物！ 冷たいお水！」

散々騒ぎ立てた後、ちよつと台所借りるぜー！ とかのたまつて太子は走り去った。

布団に転がって間抜けにびよこびよこ口から体温計のぞかせて、どう見たって熱ないよなーとかのんびり考えてみた。

「……………いやいやいやいや」

布団に寝転がっていると、無条件でうとうとと眠りそうになつてくるから困る。

このままでと完全にわけのわからないノリに流されてしまふという危機感から、無理やり睡魔を引きはがして体を起こそうとした。

「あ！ お前何やつてんだ！ 寝てろつて！」

見事に中断された。肩を押されてとさりと再び仰向けに。文句の一つでも言つてやろうかと思つたのに、体温計が邪魔だった。

「……………熱ないな。いや、でも油断は大敵だ！」

「……………はあ」

一体太子は何と戦っているんだろうか。見えない仮想の敵でもこしらえているんだろうか？ 皆目見当つかない意味がわからない。

「じゃあこれ水枕。で、お水。タオルはぬるくなったらすぐ
言えよ！ 私がんばって看病するから！」

さあ何でもどんとこい、と言わんがばかりに胸をはる太子
に、ようやく僕は話しかけることができた。

「……………看病って、もしかしなくても僕ですか」

「お前以外誰がいるんだよ。こんな妙な季節に風邪引くや
つ」

「……………風邪？」

「ひいたんだろ？ 外出るのつらいくらい具合悪いんだ
ろ？」

「……………」

ようやく事態が飲み込めたけど、あんまりなオチに逆に目
眩がしそうで思わずため息をついて目を閉じた。

「お？ 寝るの？ いいぞ！ 私がずっとここについてるか
らな！ 安心して休むといい！」

「……………」

ああもう、このバカ、と。

吐息だけで罵倒して、手のひらで目を覆った。

時間は少しさかのぼる。

『はいもしもしイケメンすぎて困っちゃう、いや、そんな
ことは、ない！ で、君どちら様？』

『あー、太子ですか。自信なくなるんできちんと名乗ってく
ださいよ。僕ですけど』

『妹子？ お前こそちゃんと名乗れよ電話してきたのそっち
だろ。それともアレか？ 最近流行の滝滝詐欺か？』

『なにその頭悪そうな手口！ どうやって騙すんですか誰も
騙されないでしょう。違いますよ本人です』

『嘘吐きは皆そういうんだ！ 私は騙されないぞ！』

『僕を疑っている時点で騙されてますからね。まあもういい
です。用件だけ端的に申し上げますと今日の約束はなかった
ことにしてくださいそれじゃあ』

『わあああああ待てコノヤロウ！ なにお前デートのドタキ
ヤン？ 私が昨日だけぐっすり寝たと思ってるんだ！
楽しみすぎて起きてられなかつたんだぞ！』

『快眠だったならいいじゃないですか……………今日ちよつと
ほんと無理なんですよ……………』

『……………え、何々、どうしたのお前？』

『実はですね……………』

僕は簡単に自分の状態について説明した。

つまり鼻水とくしゃみが出ても止まらないついでに咳が出る。目の奥がずーんと重くてついでに頭もぼんやりする。どうしようもなくだるくて眠気もひどい。

『……………というわけで、ちよつと外に出る元気がないんです』

太子の相手をする気力も体力も。

『……………そっか』

意外なことに太子は、あっさり引き下がった。

もつと文句言われると思っていたから意外で、でもありがたかったので安心していただけだ。

『じゃあまた今度にしような。お大事に。ちゃんと寝るんだぞ？』

『……………？ 太子こそ、夜はきちんと寝てくださいね。それでは』

失礼します、と告げて電話を切った。

立て続けにくしゃみが出て少し疲れて、窓の向こう、差し込んでくるうららかな春の日差しと心地好さげに吹くおだや

かな風を睨みつけて咳いた。

「……………だから春のいい天気の日には憂鬱なんだ」

——花粉なんて、と。

「……………あのですね、太子、僕実は」

「風邪なんだから！ 喉も痛いつて言ったしな！ 頭も痛いなら決まりだな。しかたないからデートはまた今度でいいから、今日はしっかり休むんだ！」

「……………」

ありがたくなって涙が出そうな聞き分けの良さ。

それが勘違いでなければどんなにか。

もうわかった。

完全にわかった。

——太子は僕の花粉症を、風邪だと誤解している。

それはつまるところ太子は花粉症持ちではないってことも意味している。花粉症ならそんな勘違いする訳ない。ここに

若干の恨めしさが生まれるわけだが、それを差し引いたつてがっかりするほどの残念っぷりだ。なにこの盛大な勘違いっ子。

僕は。

「……………あの、太子？」

「おう！　なんだ喉飴か！？」

「いや……………」

少しだけ悩んだ後。

「えっと……………」

「何でも言うといいぞー。私がんばって看病してやるからな！」

感謝しろ、とえらそうに言う太子を眺めて。

「……………布団冷たいんでいっしょに寝ませんか」

「むっ」

「太子むこうむいて」

「う……………なんかちよつと近すぎないか？」

「仕方ないじゃないですか。布団せまいですし」

「なにもいっしょに寝なくても……………」

僕は結局、太子の盛大な勘違いを訂正することは止めてしまつて。

この状況を、僕なりにめいっばい楽しむことにした。

太子に背中を向けてもらつて後ろから抱きしめる。ぬいぐるみでも抱くように。

多分太子は緊張しているのだろう。肩に力が入っていてがちがちで、リラックスしてほしくつて首筋に唇を寄せてみた。

「ぴゃあ」

「……………なにか変な鳴き声がしませんでしたか」

「きききききのせい！　とてもすごく気のせい！」

「そうですか？」

ぎゅ、と力のこもる肩にあごをのせて、相変わらずくさいようなむしろろ落ち着くような、太子のにおいをかいで目を閉じた。

「ようやくゆつくり眠れそうです」

「……………私はぜんぜんゆつくりできないそうですよ」

花粉がはびこっている間はずっと、こうして、こもっていることができればいいのに。

明るい部屋、せまい布団。

僕と太子と、ふたりきりで。

「看病しましよ
(太子の場合)」

2010/05/02

『あんなー妹子。お願いがあるんだけどな、一生のお願い』
『なんですかいやですよお断りします』
『……………私まだ何にも言っていないんだけど？ どういうこと？』
『どうせ太子のことだからろくでもないんだろ？と。一生のお願いってしかも何回目だと思ってるんですか』
『別に一生で一回きりだなんて一度も言っていないからいいじゃないか』
『はあまあいいですけど。代わりにしよっちゅうお願いされるならそのほとんどを無視したっていいじゃないですか』
『何だとコラ！ 私を誰だと思ってるんだよ！！』
『倭国の摂政ですわ』
『そうそう！』
『僕の恋人です』
『……………』

『どうしましたか太子。あっているはずですよ太子』
『そこまでわかっててどうしておまへは私に優しくないんだろ？』
『で、何ですか？』
『なにが』
『一生のお願いです。一応聞きますから』
『なんかもうめんどくさくなつたから一言でいうとな、今日の約束は延期にしてほしいんだけど』
『……………なんですって？』
『私だって悪いと思ってるよ、私から誘つたし。だけどな……………』
そこで突然鼻がむずむずして、我慢できなくてそのままくしゃみを連発した。
くしゃみのしすぎで死ぬかと思った。腹筋とか。そろそろ割れそう。あ、でもよく考えたらそれはいいことなのか？
筋肉お化けに一步前進だ。
あー、と唸って涙を拭いながら、受話器に話しかける。
『ごめん。まあ、だいたいそんな感じで……………』
『わかりました』
『うん？』
『そうですわね。約束ならいつでもできますし。今日のは延期にしましょう。だから太子、今日は外に出ちゃだめですよ』
『うん、今日は家にいるつもりだけど』

『わかりました。おとなしくしているんですよ？ それで
は』

いやに聞き分けよく、あつさりと電話は終わってしまった。
助かるんだけど。いつも怒られて慣れているとはいえ、や
つぱり妹子は怒ると怖いからできるだけ怒らせたくはないし。
でもあつさりしすぎてなんだか気味も悪かった。

「……………ま、いつか」

まったくしやみが出てきて鼻水も出たから、あわてて私はテ
イツシュ箱に駆けつけた。

ティツシュを箱ごと抱えてゴミ箱をそばに待たせながら、
窓の外をにらむ。

どうしようもなくいい天気だった。日差しはあつたかそう
だし、風は気持ちよさそうだし。

せつかく妹子と遊びに行こうと思ったのに。

本当だったらこれ以上ない良い日なのに。

つまらないなーってぼやいてごろごろ転がって、またくし
やみが出て鼻水をかもうと体を起こしたら。

「何やってんですか太子」

「へ？」

なぜか、私の家に妹子がいた。

そして気が付いたら私は布団に寝かされていた。ご丁寧
にジャージまで一気にむかれてパジャマに着替えさせられて。
……………どうということ？

「熱はないですね」

「当たり前だろ」

「喉は痛くないですか」

「いやそりゃちよつとはいがいがするけど」

体温計を振っていた妹子はぴたりと手を止めて、やっぱり、
としたり顔で何かしきりに頷いている。

「風邪ですね」

ちがうよ！ と叫びたくなつただけどぎゅつと布団の端を握

りしめて我慢した。

布団を口元まで引つ張りあげて、必死に笑いそうになるのをこらえている。

ちよつと肩が揺れてしまったのを、やつぱり勘違いしている妹子が、咳は我慢しない方がいいですよとか、そんな見当違いな氣遣いをしてゆるく頭をなでってくれるから、私は寝返りをうって妹子に背中を向けた。

「今日はずつとついていますんで。何かあったらすぐに言つてください」

何はともあれおまえに言つてやりたいことはひとつだ。

風邪じゃなくて、花粉だから。

あーあ、とため息だつてつけそうなくらい、妹子には珍し
いでしょうもない間違いだつた。

あーあ。

それでも訂正を入れないあたり、私の性格の悪さが伺える。
こんなに盛大な間違いを犯す小野妹子が物珍しかったこと
もある。

こんなにも優しい小野妹子が、珍しかったことも、ある。

「なんか逆に熱出てきそうなんだけど」

ずつと笑いをこらえて肩をふるわせていたらばっさばっさと毛布を増やされてもはや暑苦しかった。

「具合悪くなってきましたか？ だから早く寝てくださいよ。
……………熱ですか？」

ひたりと妹子の手のひらが私の額に当てられる。

ひやりと薄く大きな手のひらは氣持ちが良くて、思わずため息がでる。

ふう、と吐き出した息が妹子の手首にかかった。

見るとびくりと眉を跳ね上げて、妹子が真面目くさつた顔で平然と言つてくる。

「風邪つてうつすと治るつて言うじゃないですか」

「言わないけどな。今初めて聞いたけどな。なんか先の展開が読めたけど一応聞いてやる。それで、だから何だ？」

「ここはちよつと過度の接触をはかつて僕にうつしてしまう
というのは……………」

「いーやーだー」

「……………何ですか。治るんですよ？」

「治らないよそんなんじゃ！ それに……………」

こいつは本当に、何もわかっていないんだろうなと苦笑した。

「私が仮に治ったとしても、君が具合悪くなったんじゃ意味ないじゃないか」

額の手のひらが目の上に覆い被さり、何も見えなくなつてあれれ、と思つている隙に唇を柔らかいものでふさがれた。手のひらみたいにひやりとして、反対に差し込まれるものは濡れていてあたたかい。

ざりざりと舌同士を擦り寄せられて、流れ込んでくるものを飲み込むしかなくてだんだん頭がぼうつとしてくる。

抗議のために肩を押そうと、布団から出した手は簡単に捕まえられて、指の間に指を入れられてしつかりと枕元に縫いつけられる。

ようやく解放された頃にはすつかり息が上がってしまった、お前勘違いとはいえ仮にも病人に何無理させているんだよと睨みつけてみた。

つう、と二人の間に伝つた糸がふつりと切れて落ちる、そ

れを見てしまつて何となく、恥ずかしいような氣になつて顔をしかめてしまつて。

「なに……………ちよつと」

「いや、かわいかったんでつい」

「うつつたらどうすんの!?」

「うつらないつて太子が言つたんじやないですか」

「いやそりやそうなんだけど……………」

もうなんて言つてやればいいかわからない。

片手は相変わらず繋がれたままでいつの間にか、そこだけでなくてももう全身が熱い。

困つてしまつて見つめると、今度は布団ごと抱きしめられた。

「ああもう、いいからもう寝てください。おとなしく僕に甘やかされていくください」

ぎゅう、と力がこめられる、圧迫感とは別に、胸がドキドキして苦しくなる。

——なるほど、これは。

「病気かもしれないね」

「風邪ですよ」

きつともうずっと治らない。

きつともう、これからずっと、私は君に患わされるんだ。

「……………だつたらもう、治んなくてもいいやあ……………」

目を閉じて、ドキドキしてぐるぐるして。

幸せだなああって、思った。

「種を飲み込むと
芽になるよ」

2010/08/11

う。がんばって喉を震わせるけれども空が全部飲み込んでしま

り返ってもくれないんだもんなあほんと、やになっちゃう。

曇ればいいのって思う。曇れよ、空。その青色に蓋をし

ろ。その高さを押しつぶせ。そうすれば貧弱な私の声だって、君に届いてくれるかもし

れない。

君は振り返らない。いつそ頑ななほどに、何も語らず、何も悟らず、素知らぬ風

に前を向く。どうせ見たって何も無いじゃないか。何にもない、ただっ

びろいだけがとりえみたいなどころ。あれ、じゃあ私たち何

しにここに来たんだっけな。なんか、色々と思いつけない。どうやってここまで来たんだろう。いつの間に妹子は私を無視するようになったんだろう。いつから私は君に呼び掛け続けてたんだろう。何がしたかったんだろう。何を言いたかったんだろ。何のため？ どうやってここ来たの？ そもそもここがどこだろう。二人で来たのかな。別々に来たのかな。いつしよだったら並んで来たのかな。それとも今みたいに妹子が私の前を歩いてた？ それならここに来たかったのは妹子の方？ 私は妹子に連れて来られたのか。それとも勝手に付いてきちゃったのかな。わがままかな。だから妹子、私の方、見てくれないのかな。

考えるほどに過程がどろどろと飲み込まれていく。いくつもの仮定を立ててみても答え合わせの相手がこちらを見ないんだから全て等しい確率で正しくあり同時に誤りである。正答が示されるまでその真偽は定まらない。つまり正しいも間違いも全部ごたごた、夢みたいにどうでもいいってこと。

とにかく妹子は私を見てくれない。話を聞いてくれない。何もしてくれない。

何だか物悲しい心地になる。

「はらへったー」

ため息しようと思っただけで出た。

目の前の妹子が歩いてもないのにつんのめるように体勢

を崩した。

「妹子がつかつかと怖い顔してこっちに来てくれたからそれだけでいっぱいな気持ちになれた。」

「今、何か、言いましたか」

「言った、言ったよ何君聞こえてなかったのか？ あんなに何度と呼んだじゃん！ ヨーゼフ！ って」

「誰だよ、それは！」

「妹子だけど」

「妹子ですけど！？」

「妹子だよなーやつとこっち向いてくれた！ なんか、やじやんなんで二人でいるのに会話も何もならないなんてさみしいじゃん」

「疲れるんだよアంతは。なんだよヨーゼフって誰だよはらへったって。さっさか帰ってカレーでも食ってろ！」

「えー、今日は、おむすびがいいんですけど！」

「なんだっていいよ！」

「妹子の顔が怖い。目なんか三角にしちゃって、口がひくひくいてて。こわーいやあねえ最近の若い子ってすぐキレる

からー。まったくよねえ聞いてくださる？ うちの子なんてこないであらあらそれなら私のところもあらあなたも？ 一瞬で脳内井戸端会議が始められて、妹子はどこのお宅でも大人気だ。奥様方の注目の的だなんだそりゃ羨ましくなんかないが妹子のくせに生意気だ。いや断じて羨ましくなんかない私だって奥方にもてはやされたいとかそういうんじやなくてこれはただ単純に、芋の分際で生意気だつてことであれ、そういえば芋は何類だっけ。菌類？ まずいなー菌類つてたしが勝手に増えるんだよね。困るなーいつの間にか妹子王国なんて建立されちゃたらどうしようか。馬子さんに相談して早めに手を打っておかないと。例えば増えた妹子全員一個の村に押しとどめて異国語習わせるとか。なんか頭良さげでそれもまた腹立つ「僕の話聞いてますか」。

息を吸い込んで、吐き出そうとしたらその瞬間に目の前の顔は飛びのいた「止めてください臭いんですから」。

どうやってここに来たんだろ。連れてこられたんじやなかったら私が連れてきたのか？ それとも後をつけられた？ 菌類もついにストーカーなんてことを覚えたのかなんかうかつにキノコ食べるのも怖くなってきたかも。なんて、うそうそ。カレーに入れてペロリパクリ。キノコカレー、好き。ピーマン、嫌い。緑色の豆も。

何を言いたかったんだろうなって思つて、頭の中の箱をひっくり返す。どばつて中身が溢れて色んなものが巻き上がっていく。あたりを取り巻くとりどりの色の風の中に大切なも

のを見た気がした。一面の妹子。いっしょに海を渡った。一面の妹子。いっしょに馬に乗った。一面の妹子。犬もいっしょだつたかも。一面の妹子。たくさんの妹子。取り巻く風が壁みたい、一面に妹子の思い出を貼り付けて見せてくる。

誰に？ 私に。

一面の妹子は私を見ていないけれども、私はたくさんの妹子を見て泣きそうだよ。

本当だつてば。

目の前の妹子が何かを言っている。一面の妹子の声は聞かない。口が動いているのがわかるのに言葉がわかんない。何言ってるんだらうね。何言っちゃってるんだらうね？

何泣いちやっつてんだらうね。

何したかつたんだらうと私は一人になりたいなんて真つ赤な嘘を吐きたくなる。

真つ赤な妹子の手のひらは真つ白だつたけど。

ぬくもり。温もり。ぬくもること。あつたかいこと。きつと冷たいことより素敵なこと。例えばお布団の中。例えば冬から春に移るとき。ぬるぬると固いものが溶けてほころぶ。ゆるゆると無防備にやわくなる。うとうととまどろむ。たいてい夢は見ないけれど、起きたときはぼんやりとして、少しの間だけ見失う。何を考えて何を思えばいいのかわからなくて、ぬくもるといふことはそのぼんやりを否定しないでいてくれる。誰でもない私を、私を忘れたがる私をやわく受け止

めて許してくれる。

だから温もりを感じたからと、その理由はなんら不思議でない。

不思議なのは彼が、どうして私なんか、温もりを感じてくれたのかだ。

ああ私じゃないか。スイカだよ。スイカ。うん、本当はスイカって冷たい方が美味しいんだ食べたことあるから知ってる。水にひたしておいて暑苦しいお昼間に食べる。食べたら寝ちやう。種を飲み込むとおへそから生えてきちやうんだ。私は人間でいたいから、スイカ人間なんてごめんだからいっしょけんめい種を取って、そんなことしてるとあつという間にスイカ崩れちやう。ぐずぐずに。べたべたに。でるでるに。

それが何だか悲しくて、だから私はスイカなんか好きじゃなかった。

妹子は好きなのかな。だからこうやっつて手を、伸ばして、くれるの、かな。

かなあ。

よく、わからない。

頭の中が崩しちやつたスイカみたいに、ぐずぐずだ。

「好きだよ」

頭の中にスイカの種が残ってる。

私は人間でいたいから。

その種を、飲み込まず、全部吐き出してしまわなければならない。

「好きなんだ」

ぐずぐずと私の芯が崩れていくような心地がする。

おなかのすいた心地がする。

泣きたいときは熱くて、さみしいのはなんとなくひもじいのに似てる。

だから今熱くておなか为空いてるのか、泣きたくてさみしいのか、それともどっちもなのか、良くわかんなくなる。

喉の奥が詰まったみたい。

よくわからない抵抗に、種を吐き出すのが難しくて。

それでも私はこの塊を、どうにかして上手に吐き出すしかないんだ。

私はきちんと正しく正真正銘堂々と。

こちら側。

妹子のいる側。

嘘でもいいから、人間でありたいと願っている。

帰ろうかなんてどっちから言い出したことなんだろう。

なぜだか私はすっかり疲れてしまって、妹子はずっと何かを話していてくれるみたいだけど、私は長い距離を泳いだ後みたいに虚脱した気持ちのままに、何とか足を交互に動かすことだけで精一杯だった。

手をつないでた。差し出された手だった。海の中で夢の中で何にもないところで、いつでも差し出されていた手のひらだった。

私より温い手。つまりは私の方が冷たいから、妹子は私に温もりなんか感じないだろう。

どうしたら君を繋ぎ留めておけるのかなんて考えた。繋ぎ留めておきたいのかどうかもわかんなくなつたから、もう、止めた。

きつとまたすぐに忘れちゃう。

それでも今度は、せめて妹子といっしょに歩いて、手をつないで帰ってきたって、それくらいは覚えていよう。

「鏡合わせの

幸福論」

2010/08/23

こおん、こおーんと、ゆっくり降りてくる音がする。
上っていくようにも聞こえるけど、違うんだってちゃんと
わかる。

だつてここは地下だから。

一人きりでは音もなく、光もなく空は臉の裏と同じ色。

夢見るようにまつたりと、微笑む声が降ったとしても、本
当に笑っているかどうかなんてわからないんだ。

「こんばんは」

良い月夜だと、そんな、まるで意味のないことばかりを言
っていた。

かつかつと足音がする。

上ってくる。

いや下ってくる。

遠ざかる。

いやそうじゃない、近づいてくる。

「おはよう、妹子」

彼は僕の顔を見てそう、にこりと笑ってくれた。

壮絶な違和感にざわりと背中が粟立つ。

どうして。

この人は、こんな表情を作れるのか。

こんな状況なのに。

僕をこんな風にしておいて、なお。

「会いたかったんだあ、妹子に、さあ」

なんで。

こんなことを、何もない顔で言えるのだろうか。

理解できないものを人は恐怖すると言う。

今日の前にあるものがまさにそうだった。

僕は彼を理解できない。

大切な人だった。

大切な人のはずだった。

それなのに、どうして。

がちがちと音がする。

震える奥歯の鳴る音だと気付くのにどうしようもなく時間をかける。

足が萎えて立ってられない。

俯き、惨めにも背中を丸めてうずくまる。動けなくなる。

頬を伝って顎の先から落ちたものが涙なのだと気付くのも時間がかった。

口を開けば喘ぐように呼吸、呼吸呼吸呼吸。

息が苦しい。空気が薄い。

全身が赤く煮えている。灼けた空気が喉奥に張り付き呼吸

を不自由に絡ませる。

目をつむったとしても見えるものは同じなのだった。

地下のここには日も差さない。

「どうしたの、どっか、痛いのか」

絡みつくように、のたりと、腕を掌が這っていく。ぬめる

感触はたまった垢と汚れた。当然だ、閉じこめられてずっと身体など洗ってはいない。

すえた臭いも嗅ぎとれないほど、鼻は慣らされ、あるいは

涙に塞がれていた。

僕の肌の上を這いずる掌はそのまま背中にたどり着いて、

円を描くようにゆるゆると撫でられる。

う、あ、あ、と僕の口から出る音は何の意味もなさない。

「ほうら、ね？ いい子、いい子」

もう。

飢える心を抑えられなくて僕は。

涙に汚れた顔を拭うこともしないで、だっせどこは

地下で、暗くて、ろくに見えるものなどなくて。

だからもう、目の前の熱にすがりつくしか考えられなくな

って。

そうした。

抱きつく。勢い余って押し倒す。呻き声。頭でも打ったか。

知らない。関係ない。それくらい苦しめばいいんだ。それく

らい。

手探りで顔を捕まえて両手で挟み込み、上向かせて唇を塞

いだ。

鼻を鳴らす音。甘えるような。呼吸を、空気を、口の中だ

けじやなくて肺の中から体中から、全てを奪い去るつもりで

食った。せめてこの息苦しきの足しにしたかった。

しゃらり、しゃらり、思考をかき回す音。手首を戒める鎖の音。甲高く綺麗で、悲鳴みたいにおぞましい。

その冷たさを強調するように、彼が手首を押しつけてきた。脈でも止まりそうな感覚。そのまま切り落とされそうなくらいに鋭い冷たさ。無理に腕を振って逃れた。指先なら戯れるように甘く絡むことができるのに。わき上がるのは恐怖ばかりで、頭の中に直接手を突っ込まれ、かき回されているような気さえする。

その幻想を振り払いたくって衝動のままめちやくちやに口内を犯した。

じゃれてくる手を、両方もひとまとめにして戒めた。

何も見えないから、何も感じない。

何も感じられないからもう、奪うしかない。

もう僕に残された抵抗は、それだけしかないじゃないか。

「あ、は。妹子がつつきすぎ。なにに、今日も遊ぶ？
いよ、妹子ならいいよ。それじゃあ何して遊ぼうか？」

「うるさい……………」

「優しくしてくれたらうれしいけど、ちょっと物足りないん

だよ。乱暴なのもいいんだけど、妹子って加減知らないから動けなくなっちゃう。でもま、妹子なら、いいよ。妹子ならもう何やってもいいよ」

「うるさい、うるさいうるさいうるさい黙れええええッ！」

どこにこんな力が残っているんだろう。

信じられないくらいの勢いで、声は喉奥から飛び出したのに。

きっとこの声はどこにも届かない。

闇に吸われて、落ちていく音すら届かない。

「……………なあに、妹子お前、もしかして怒ってるのか？」

何でだよ。私何かしたか？」

「なんで、あんたは……………」

「なあに」

「何で、そんな、笑ってられるんだよ……………っ！？」

揺れるように頭が痛んだ。壊れてしまいたいそうだと思った。

壊れてしまいたいそうだとも思う。片手で両手を戒めて、片手は埃まみれの床を這いずっている。押し倒したこの人の、首はどこかと探していた。

「なに、そんなこと」

熱い掌を闇雲にさまよわせて、相手の体温を探していた。ぬめる肌をたどって首を目指した。服なんていう邪魔なものはないから、どこを触ってもあんただった。浮いた骨の一本一本をなぞることができた。わき腹を通るとくすぐったそうに腰が浮いた。肋骨から順番に鎖骨までを確かめた。ようやく見つけた首筋の、脈を探るように撫でた。貧血みたいにくらくらして、不意にこみ上げる衝動のまま、首筋や鎖骨に容赦なく強く歯を立てた。

「うあ……………う、あつ、あ……………」

拒絶すればいいのに、しない。震えて切なげに溶ける呼吸が幻であればいいのに、嘘じゃない。

組み敷いた体は確かにここにあつて、歯を食い込ませるほどに声は揺れて、生ぬるい血の味が口を満たして鼻の奥まで突き抜けていく。

このまま全部食べてしまえば自由になれるかもしれない。なんて、ことを思う。

浅ましく音が立つほどに、強く吸って、舌を押しつけた。

「……………妹子といっしょにいられる。妹子を独り占めできる。妹子が会いに来てくれる。妹子が愛しにきてくれる」

太子は震える声で、抑えるようなささやき声で何かを話しているようだった。

掌は尚もさまよい続ける。脈を押しして弾力を楽しみ、首にも巻かれた鎖を弄び音を立てる。

しゃりしゃりと鎖が鳴る度に、魂ごと闇に犯されていく心地がする。

「幸せ。な？ 幸せになれる。なれるんだよ、これからずっと」

太子の言葉よりも何よりも、たまに乱れる呼吸が、何よりも僕を興奮させた。言葉の端が甘く揺れる度に、言いようのない喜びが止め処なく溢れる。その甘い衝動に酔う。

こんな状況で、それでも腹の底に重たく熱がたまっていく。異常というならもう、初めから、何もかもがそうだった。

今更誤魔化してもしょうがないじゃないかと、思いついたとたんに喉奥から、壊れたように笑いが弾けた。

げらげらと喉を震わせた。痛くても血の味がしたとしても抑えられなかった。その必要もなかった。

だって何も見えないこの場所に、いるのは僕とあんたなんだ。

こんなに愉快な気分は久しぶりだ。

「二人で幸せになれる。ね、なれるんだよ、これからは、もう、ずっと、何も無い。何も無いんだ」

ぱくりと。

太子が口を開いてそのまま、喘ぐような呼吸の合間に言った。

「良かったね！」

そう。

とても、楽しそうに。

もう、何もかもが満たされている。

満たされていて、溢れだして壊れそうだった。

そして太子の言うことは、いつだって正しい。

思い知る。

太子はいつだって正しいのだ。

だったらもう。

僕たちは。

二人きりで、幸せ、だった。

月なんて見えないし夜なんてないよって。言ってやろうと思っただけど、やっぱやめ。

「気分はどうですか？」

「もちろん、最高だけど？」

そう、それは良かったですねと、優位者の余裕で答えられたけど。

だめだよ、だめだめ。ぜんぜんだめだ。

妹子、君はわかってないよ。

「「囚われなのに」」

言葉が重なる。小さく息をのむ音がかわいらしい。たぶんすぐさま、いつもの仏頂面に戻った。それもかわいらしい。見えないけどな。

でもきつと、合ってる。

妹子の反応くらい、見えなくても、見える。

すぐそばに気配があつて、あつという間に押し倒される。乱暴なんだあ。いつつも、こいつは。

鎖の上から押しつけてくる掌とか、雄弁だね。苛立つてる。いいなあ、それ。なんか、妹子が怒ってるのつて怒ってるんだけどかわいいんだよね。

かわいいんだよ。大好きだよ。

「……………いつまであなたは、そんなことを言っていていられるんでしょね」

御託はいいから、やるなら、やろうよ。

真つ暗闇の中には何にもなくて、妹子が来てくれたときくらいにしか遊べないから、いつでもいつしよにいてくれるわけじゃないんだからいつしよの時くらいちゃんと遊んでほしい。

催促しようかどうか、悩んでるうちに呼吸が塞がれている。

どろどろと送られるものを素直に飲み込んで、もつともつとと強請るように舌を突き出す。柔らかく噛みつかれて反射的に息をのむ。

やっぱり、いつもより、乱暴。

でもこれくらいがちようどいいかもしれないね。

そうじゃないと、たぶん私よりお前の方が、先に壊れちゃうと思うんだけど。

私を捕まえたのだとお前は思いこんでいる。たぶんね、それは逆だよ。

お前が、私に捕まってくれたんだ。

でも偉そうな妹子はかわいくて、愚かな妹子もかわいくて、これからのことを思うとぞくぞくして、楽しみだから、内緒。教えてやらない。

物が変化していくところを観察するのが私は好きだ。

例えば空を流れる雲の形。例えば手を離れた器が落ちてたきつけられて、割れてばらばらになる瞬間。

壊れていくものなら特にそう。

面白い。

私は可哀想で可愛らしい、目の前の生き物が大好きなんだ。だから遠慮はいらないから、もつとちゃんと、遊ぼうよ。

喉の奥からくすくすと、狂ったように声が溢れた。

まるで幸せを塗りたくったような、腐ってしまいそうに甘い音だった。